

かずひろ  
石川 和弘さん  
(仙波町)



○プロフィール

39歳。2019年5月に市民団体「サイクルタウンさの推進委員会」を発足。メンバー18人と、ロードバイクを通して、市内の活性化や自転車を活用した地域づくりのため、日々奮闘しています。

キラリ★  
話題の「ひと」

「奥佐野」の魅力を知ってもらうために

皆

さんは「奥佐野おくさの」という言葉を知っていますか？

石川さんが代表を務めるサイクルタウンさの推進委員会では、市内北部の中山間地域に隠された魅力を知ってもらい、活性化に取り組むため、同地域を「奥佐野」という愛称で呼んでいます。石川さんは5年前からロードバイクに乗

り始め、奥佐野を走っているうちに「市内の人が地元を誇りを持ち、愛着を持っていただけ活動を行い、奥佐野の素晴らしさを広めていく団体をつくりたい！」と強い気持ちを持つようになりました。

石川さんに奥佐野の魅力を伺うと「サイクリストにとって、山に囲まれ起伏に富んだ地形は、首都圏にはない魅力です。風の心地よさも最高です。また、サイクリスト同士や地域の方々がすれ違い際にあいさつを交わす素晴らしい文化があります。この地域では当たり前とも思いますが、とても魅力的なものに感じるものがたくさんあります」と話します。

また、石川さんは市内の活性化のために、サイクルスタンドの設

置にも精力的です。「サイクルスタンドが普及するとロードバイクで佐野に行きやすくなる、飲食店や観光施設に立ち寄りやすくなる。こういう文化が根付くことで町おこしにつながればと思っっています。今後の展望として、サイクルイベントの開催やサイクルマップの作成を行い、市内外の方々にPRを続けていきたいです」と熱く語ります。

奥佐野を走り続けることに対し石川さんは「ロードバイクで飲食店や観光施設に行くことで、車と違い地域の皆さんとの距離を近くに感じ、声を聴くことができます。毎日小さいことの積み重ねですが、ロードバイクの魅力、佐野の魅力、そして奥佐野の魅力を伝え続けていきたいです」と話してくれました。大きな夢とともにこれからも石川さんは走り続けます。

(市民記者 飯田瞬)



▲同会の活動風景

▶同会の詳しい活動内容はこちら



市長からの  
メッセージ

現在、私の選挙公約を踏まえた、第2次佐野市総合計画中期基本計画の策定に取り組んでいます。選挙公約である重点施策の新型コロナウイルス感染症対策や令和元年東日本台風被害の復旧・復興の加速はもちろん、45項目についても計画的に政策への落とし込みをしています。その中でも、市役所組織の再編を行い、平常時から非常時にかけて市民生活の安心につながるため「技術センター部」を設置します。

佐野市は11万7千人の人口でありながら、教育環境には私立4校（高校3校・中等教育学校1校）、県立4校（高校3校・中学1校）があり、教育先進市であります。特に義務教育については、私立・県立・市立も含め個性と特色ある教育を行っています。今以上に教育力を高め、課題の解決を図るために、教師や保護者などで検討する「公私連絡協議会」を設置し対応していきます。さらに「リカレント教育」として、いったん社会人になった方がもう一度学びを通して、新たにスキルアップした社会人として働いていただく環境づくりに力を入れたいと思っています。特に福祉関係の介護職など、雇用と人材の確保が難しい分野で貢献していただけるようにしていきたいと考えます。

金子 裕

(10月15日 記)

今回の表紙 「日本フィルハーモニー交響楽団の演奏」 令和3年10月12日撮影

南中学校の生徒を対象に、日本フィルハーモニー交響楽団によるオーケストラ公演が実施されました。素晴らしい演奏の数々に、生徒たちは熱心に耳を傾けていました。





## 困窮者支援活動

9月16日(木)、佐野市女性防火クラブは、生活困窮者を支援するため、除菌ウェットティッシュ100個と日用品、食料品など270点あまりを社会福祉協議会へ寄贈しました。この活動は、コロナ禍の中、思うように活動ができない中で何かクラブ員としてできることはないかと各支部長で話し合った結果、会員たちが物品を持ち寄ることで実現したものです。

同クラブは「家庭から火を出さない」をモットーに、市内31支部で活動しています。今回の寄付は、火災予防啓発とともに、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目標2「飢餓をゼロに」および目標11「住み続けられるまちづくりを」に貢献する一環として実施されました。

同日、同クラブの3役らが総合福祉センターを訪れ「困っている人の支援へ火災予防啓発も兼ねてぜひ活用してほしい」との会員の思いも込め「ひのようじん」と書かれたオリジナルの除菌ウェットティッシュなどを寄贈しました。

同クラブは、今後もこれからの活動を会員の皆さんと続けていくとのことです。

(市民記者 葛貫郁子)



▲寄贈の様子

## デジタルサイネージ（わが街NAV I）を設置しました

10月1日(金)から、イオンモール佐野新都市のセントラルコートにデジタルサイネージ「わが街NAV I」を設置しました。デジタルサイネージとは、デジタル技術を活用した電子広告のことです。今回設置した「わが街NAV I」は3つのモニターに分かれており、中央には佐野市の紹介動画、向かって左側には市からのお知らせをタイムリーに放映しています。また、向かって右側では、市内事業者からの有料広告を放映させていただいています。

この「わが街NAV I」を活用し、イオンモール佐野新都市を訪れた市内外の方に向けて、市政情報や市の魅力を発信していきます。

お近くにお立ち寄りの際は、ぜひご覧ください。



▲「わが街NAV I」の設置状況

子どもの頃、近所のおばさんからセンベン（煎餅）やアメツタマ（飴玉）などをもらったときには「オーキ二ネー」といいました。友だちから物をもたらったときには「オーキ二ネー」といいました。オーキ二は、お礼のことばで語尾にネーを添えるといねいになり、ナーを添えるのとちよつとぞんざいな感じはするが、親しみがありません。オーキ二は関西語で「おおきにありがとう」の略語といわれています。昭和20年ごろからオーキ二はだんだん衰えはじめ、それに代わって「ありがとう」が使われるようになりました。

ところで、飯を「たく（炊く）」という共通語があります。明治生まれの人たちの多くは、この「たく」を「ニル（煮る）」といっていました。「ニル」は「たく」よりも古くからあり、昭和10年代まで「ニル」が日常的に使われていました。特に田沼や葛生の山手地方では「ニル」を使う傾向が強かったようです。その後、共通語の「たく」が東京方面から伝播し「ニル」は次第に消えていきました。飯は「たく」、汁物は「ニル」のように「たく」と「ニル」が使い分けられるようになったのは、昭和20年になってからのことです。

また「煮しめる」ことを、方言では普通ニヒラカスといっています。ニヒラカスともいいます。ニヒラカスは煮物の煮汁がなくなるくらいまでじっくり煮て、その汁をしみ込ませることをいいます。明治・大正生まれの人たちは、ニヒラカスを昭和の中ごろまで使っていました。

「鍋に入れてしばらくニヒラカシタから、しょうゆの味がよくしみてるダンベー」

(市民記者 森下喜一)

佐野市  
ばんたい

飯は「ニル（煮る）」から  
「たく（炊く）」へ

